


特定非営利活動法人 日本免疫学会
2022年度 前期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	金谷高史	会員番号	0031393	
申請者の所属・職名	理化学研究所 生命医科学研究センター 粘膜システム研究チーム 副チームリーダー			
出席会議名	International Congress of Mucosal Immunology 2022			
発表論文タイトル	RelB and C/EBP α critically regulate the development of Peyer's patch dendritic cells			

実施結果:

この度は Tadamitsu Kishimoto International Travel Award を賜りまして誠にありがとうございます。私は 2022 年 7 月 16 日～20 日にアメリカのシアトル市で開催された 22nd International Congress of Mucosal Immunology 2022 (ICMI2022: 国際粘膜免疫学会) に参加しました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、久しぶりの海外渡航となりました。国内の航空会社を利用にしたにも関わらず、成田空港の搭乗口で日本人の姿を殆ど見つけることができず、日本人の海外渡航は未だ少ない状況にあることを実感しました。

ICMI2022 での発表は、シンポジウム、口頭発表およびポスターセッションの 3 つの形式で行われました。COVID19 の影響もあってか、呼吸器、ワクチン効果の検証や COVID19 の重症化に関与する因子の探索などを対象とした研究が多く発表されていました。腸管免疫に関しては、近年寄生虫感染時の免疫応答を活性化させることが明らかにされた tuft 細胞を対象とした研究発表が多く、毎日何かしら tuft 細胞に関連する研究発表があったことが印象的でした。一方で私が研究対象としているパイエル板や M 細胞に関する演題は殆ど無く、この点に関しては少し寂しさを感じました。

私は口頭発表のセッションにおいて、パイエル板のドーム下領域に分布する樹状細胞の分化や機能が転写因子 RelB や C/EBP α によって制御されていることを発表しました。発表に用いた免疫染色の画像に興味を持ってくれた複数の研究者から免疫染色のプロトコルに関する質問を受けました。また、関連分野ジャーナルの editor が研究内容に興味を持って話しかけてくれたこともあり、オンラインならでの研究交流を楽しむことができました。

シアトルでの学会発表後は、友人の留学先であるコロンビア大学医学部の Domenico Accili 教授が主宰する研究室を訪問しました。Accili 教授は糖尿病研究の第一人者であり、インスリン産生における腸管上皮細胞の役割に着目した研究に取り組んでいます。非常に特殊な試験系ではありますが、複数の転写因子をノックアウトすることで腸管上皮細胞からインスリン産生を誘導することが可能であることから、Accili 教授はこの知見を糖尿病治療へ応用するための研究を展開しています。私は現在の研究内容を紹介し、腸内細菌が産生する代謝物と腸管上皮細胞の分化の関連に関して意見交換し、今後の研究に関する助言を貰うことができました。

末筆となりますが、本 travel award 設立に御尽力頂いた岸本忠三先生、選考委員の先生、またご推薦頂きました大野博司先生に御礼申し上げます。